



地場産業 ひょうごのじばさん



ケミカルシューズ

▼国内外のプロモーション活動

日本ケミカルシューズ工業組合によると2023年の生産量は、同組合の加入企業74社の合計で、714万足（前年比+1.4%）、生産額は195億34百万円（同+2.9%）とわずかながら増加した。ただし、新型コロナウイルス後の回復は鈍く、コロナ前の水準（19年同85社合計で1310万足、330億6百万円）の6割弱にしか戻っていない。

国内需要の落ち込みなど厳しい状況が続く中、同組合は海外ニーズを掘り起こそうと、初の海外商談会「神戸シューズフェア」を24年11月シンガポールにおいて開催した。同組合の会員企業10社が参加し、事前に現地マーケットをリサーチした上で、婦人靴を中心としたエレガンスで快適性を重視した商品を展示した。現地の卸売・小売業者と商談を行うだけでなく、その他業界関係者にもその魅力と品質の高さを直接伝える機会となった。

また、国内では、市や商工会議所などの協力で開かれるオープンファクトリーイベント「開工神戸」にケミカルシューズ関連企業が参加している。長田地区周辺のものづくり企業の製造現場を一般の人に公開し、ものづくりの魅力を感じてもらおうイベントで、23年に始まった。24年11月に開催された3回目は33社が参加、シューズメーカーからは5社が自社の製造現場を公開し、来場者に職人たちの技を間近に見てもらって神戸の靴の魅力をアピールした。

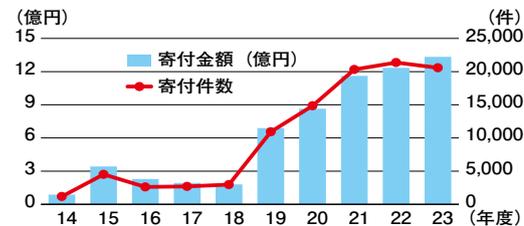
豊岡のかばん

▼ふるさと納税の寄付金獲得に寄与

2023年度の豊岡市へのふるさと納税は寄付金が13億3362万円（2014年度比15.2倍）、寄付件数が2万569件（同17.5倍）、と10年前と比べて大幅に増加している〔図表1〕。この寄付金獲得に寄与している返礼品のひとつが「豊岡靴・財布」である。同市の公表値が残る19年度以降、寄付金額の半分を維持している〔図表2〕。

豊岡市は、ふるさと納税による税収増加のために新たに大手専用ポータルサイトを追加した。また、地域ブランドである「豊岡靴」を中心に返礼品の品数を拡充するとともに、専門業者による写真撮影や特集記事ページを製作するなどPRを図っている。ふるさと納税をきっかけに豊岡靴のクオリティの高さを知る人も増えつつあり、豊岡靴のさらなる認知度向上が期待される。

〔図表1〕 豊岡市のふるさと納税の状況



総務省「ふるさと納税に関する現況調査」より作成

〔図表2〕 豊岡市のふるさと納税返礼品の割合 (寄付金額ベース) (%)

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
豊岡靴・財布	58	61	55	51	49
但馬牛・神戸ビーフ	16	10	14	13	9
旅行券(※1)	10	9	12	17	29
カニ	4	7	7	8	—
米	3	—	—	—	—
菓子・デザート	—	3	—	—	—
ハンガー他	—	—	3	—	4
その他	9	10	9	11	9
合計	100	100	100	100	100

豊岡市「ふるさと納税の状況」より作成

(注) 寄付金額は速報値、割合は速報値における割合
(※1) 旅行券：城崎温泉等豊岡市内の宿泊施設で利用

丹波立杭焼

▼丹波焼「最古の登窯」と大阪・関西万博

丹波焼は瀬戸、常滑、信楽、備前、越前とともに日本六古窯のひとつとして知られる。その特徴は、「灰被り」と呼ばれる独特の色と模様である。約1300度に達する登り窯の中で約60時間かけて焼成される間に、燃料として入れた松の薪の灰が器に降りかかり、土の鉄分や釉薬と溶けあって窯変する。灰の振りかかり方や、炎の当たり方の違いにより一品ずつ異なった質感を生み出すので、実用だけでなく観賞用としても人気がある。

上立杭地区にある丹波焼「最古の登窯」は1895（明治28）年に築窯されたもので、全長約47m、幅約2m、高さ約1mで、現在使用されている窯の中では国内最大の規模を誇り、1973年に兵庫県の重要有形民俗文化財に指定された。永年の使用により経年劣化が激しかったが、丹波立杭陶磁器共同組合が中心となり多くのサポーターなどの協力も得て、2014年から約2年かけて大規模修復を行った。

また、同組合は「最古の登窯」の公開焼成を2025年5月頃に計画している。これは大阪・関西万博にあわせて兵庫県が展開する「ひょうごファイールドパビリオン」の一環として行うものである。このほか、大阪・関西万博の「いのちの遊び場クラゲ館」に丹波焼のクレイバー（長さ20cm、幅4.5cm、厚さ2.6cm）が内装の一部として使用される予定となっており、同組合の50軒の窯元が分担して800枚を製作した。